

主 題：福音を惑わす者

聖書箇所：マタイの福音書 13章24-43節

私のところにはいろいろなメールなどが入って来ますが、最近、耳にするのは、また、目にするのは「教会に行ってメッセージを聞くときに神のことばが語られていない」ということです。恐らく、浜寺で育った皆さんはそんなことを聞いても「本当かな？」と思われるでしょう。確かに、今、この日本だけでなく様々なところであって、教会の中で神のことばではなく人間の考えや、教会に集まっている人たを何とか喜ばせようとして話すということが現実の問題になっています。皆さんよくご存じのように、終わりの時代にはそうになっていくと聖書は教えています。教会員が自分たちが聞きたいことを語ってくれる人たちを集めると…。(テモテへの手紙Ⅱ 4：3-4「:3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、:4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。）」ですから、今、教会にあつて「さばきがある」とか「罪」「永遠の地獄」などのメッセージを語る教会が大変少なくなっているのです。私たちの使命は神が言われていることを神に代わって伝えることです。それはどの働きにおいてもそうです。

今朝、皆さんとごいっしょに学ぼうとしているのはマタイの福音書13章です。なぜ、敢えてこの箇所を選んだのか？教会の中で神のことばが語られていないという危機的な問題を抱えている今、私たちはしっかりと何が神の真理なのか、そのことを知らなければいけないからです。今から見ていくマタイの福音書13章には七つのたとえが出て来ます。かつて、私たちはこの箇所から学んでいます。このたとえが私たちに教えていることは、簡単に言うならこういうことです。それは「神の働きが為されるときにはサタンの働きも為される」ということです。神のみわざが為されるときには必ず、その働きを妨げるものが「惑わしの働き」を為すのです。そのことをイエスは警告されたのです。そして、その当ても、そして、現在も警告されたことが現実となっているのです。

13章を見ると、このときイエスがおられたのはイスラエルのガリラヤ湖畔だったことが分かります。ここでイエスは人々に「天の御国」について話しておられます。そして、そのことを「たとえ」を使って伝えようとされます。まず、なぜ、「天の御国」、すなわち、「永遠のいのち」のことを話されたのか？その「永遠のいのち」への門がまだ開かれているからです。もう閉ざされているならそのようなことを話すのは無意味です。まだ開かれているからイエスはその話をされたのです。「救われるチャンスがまだある」ということです。しかし、現実の問題は、救いは備えられているのに、すべての罪を赦してくださるのに、その救いを望んでいる人がそれほどいないということです。

救いに与っている皆さんからすれば非常に驚きだと思えます。罪を犯すなら必ず神のさばきを受けるというのは当然のことです。そして、神は何とその罪の赦しを備えてくださっています。それにも関わらず、その救いを拒み続けている人がいるのです。

イエスがこのたとえを話されたときに、人間には二種類の人がいると言われていました。それは、福音のメッセージを聞いてそれを心から受け入れる人と、それを自らの意志で拒む人です。まず、最初のたとえがマタイ13：1-23に出て来ます。ここでは「種まき」のことが書かれています。福音の種が蒔かれたときに人々がどのような応答をするのか？ということです。道端に蒔かれた種、岩地に蒔かれた種、いばらの中に蒔かれた種、これらは福音のメッセージ、救いのメッセージを受け入れない人たちのことです。イエスがこのたとえを話されたときに、確かに、そのように神のメッセージは伝えられているのに、皆が皆、それを受け入れるわけではないと言っています。

そして同時に、神のメッセージが語られるときに、神の敵であるサタンの働きも為され続けるということも言われました。サタンが何をしようとしたのか？サタンは神でないのに関わらず、私たちと同じように神によって造られた存在であるにも関わらず、自分を神として、そして、人々が間違ってもこの救いに与らないようにと妨げ続けるのです。彼はあらゆることをもって人々が救いに与らないようにと惑わし続けるのです。今日、私たちが見ていく「たとえ」はサタンが惑わすその働きです。どのようにサタンは働こうとしているのか？また、働いているのか？なぜ、私たちがそれを見るのか？注意するため、気を付けるため、惑わされないためです。願わくは、一人一人の信仰がぐらついたものでなく、しっかりと神のみことばに根付いたもので、何があってもどのような教えが入って来ても惑わされない信仰者になることを心から願います。

13：24からはイエスの二つ目のたとえが記されています。それを見ていきます。「良い麦」と「毒

麦」のたとえです。

☆13章で語られた二つ目のたとえ

A. 良い麦と毒麦 24-30節

24-30節「:24 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。」、群衆に対してイエスはこのたとえを話されるのです。「天の御国は、こういう人にたとえることができます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。:25ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。:26 麦が芽ばえ、やがて実ったとき、毒麦も現れた。:27 それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。『ご主人。畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。どうして毒麦が出たのでしょうか。』:28 主人は言った。『敵のやったことです。』すると、しもべたちは言った。『では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』:29 だが、主人は言った。『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。:30 だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ。』、これがイエスが二つ目に群衆に語ったたとえでした。良い麦が蒔かれた畑に敵がやって来て毒麦を蒔くということです。

この敵は何を望んでいたのでしょうか？良い麦を蒔いた主人を困らせて損害をもたらそうと、そのように企てるのです。さて、この麦と毒麦、私たちは余り目にするのがないので毒麦がどういうものか知りません。でも、毒麦は実際に存在しています。毒麦はイネ科の植物で明治の初めにこの日本にも入って来たと言われています。軸の両脇に小さな穂をつけた植物です。学名を見ると（1）細麦と（2）酩酊する、幻覚を起こす、このような意味を持ちます。だから毒麦なのです。

正直、私もどのようなものだろう？と思います。この話を見たときに、これを聞いていたイエスの弟子たちも含めた群衆たちはこのたとえが分かったのです。今、私たちにこのたとえが語られたとするなら、「毒麦とはどんなものですか？麦ですら余り見たことがありません。」と言います。植物図鑑を見ると二つは非常によく似ています。あくまでたとえです。これを聞いていた人々はこのたとえをよく理解したのです。この現状を見たときに、しもべたちが『では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』と申し出ます。そのとき主人は「収穫のときまで待ちなさい」と答えます。

実際に、毒麦が良い麦といっしょに育って来たとき人々はそのように対処したのです。というのは、敵が来なくても自分が蒔いた麦に毒麦が混ざっている可能性があるのです。ですから、この毒麦は農夫にとって大変な頭痛の種だったのです。見かけが非常によく似ていて、しかも、芽が出て来たときもどちらがそうなのか見分けがつかないのです。だから、主人が言ったように『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。:30 だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。』と、収穫できるときになれば区別できるからその上で「毒麦を集め、焼くために束にしなさい。」と言うのです。芽が出始めて収穫のときまでに麦と毒麦の根が絡み合っている場合が多くて、毒麦を抜くと良い麦まで抜いてしまうことがあるので、こういうアドバイスが出て来るのです。

さて、このたとえをイエスは話されたのですが、実際に、このことを聞いていた人たちがみなこのたとえでイエスが言わんとしたことを汲み取ったわけではありません。弟子たちも同様でした。ですから、36節を見ると「それから、イエスは群衆と別れて家に入られた。すると、弟子たちがみもとに来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。」とあり、弟子たちも分かっていなかったのです。ガリラヤ湖畔で群衆に話した後、イエスは群衆から離れて家に入れ、イエスの許にいたのは弟子たちだけでした。弟子たちは「先ほどのたとえはどういう意味なのか教えてください」と問い掛けるのです。そして、イエスがそのたとえの説明をしたことが37節から書かれています。このたとえが何を意味しているのかを見るために、一つ一つのことばを見ていきましょう。七つのことばがあります。37-40節を見てください。「:37 イエスは答えてこう言われた。「良い種を蒔く者は人の子です。:38 畑はこの世界のこと、良い種とは御国の子どもたち、毒麦とは悪い者の子どものことです。:39 毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫とはこの世の終わりのことです。そして、刈り手とは御使いたちのことです。:40 ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります。」と、これがイエスが弟子たちに与えたこのたとえの意味です。

1. ことばの説明 37-39節

1) 良い種を蒔く者 37節 : 人の子、イエスご自身のことです。

2) 畑 38節 : この世界のこと

3) 良い種 38節 : 御国の子どもたちのこと、すなわち、救いに与っている者たち、罪の赦しをいただいた真の信者たちのことです。

4) 毒麦 38節 : 悪い者の子どものこと、つまり、この救いを拒んでいる不信者のことです。

ここで見ていただきたいのは、「御国の子ども」と「悪い者の子ども」と対比されていることです。

ですから、クリスチャンは天国の子どもたち、神の子どもたちです。ところが、救いに与っていない者はだれの子どもたちですか？「悪い者」と「サタン」のことです。救いに与っていない者は「サタンの子どもたち」だと、そのようにイエスは言われているのです。

5) 毒麦を蒔いた敵 39節 : 悪魔のこと、サタンです。

6) 収穫 39節 : この世の終わりのこと

7) 刈り手 39節 : み使いたちのこと、つまり、天使たちだと言います。終わりのときには神は天使たちをお使いになって、後で説明しますが、人々を二つのグループに分けられるのです。

こうしてイエスはこのたとえの解説をされるのですが、では、いったいこのたとえでイエスは何を教えたかったのでしょうか？

2. たとえの説明 40-43節

1) 主のさばき

40-42節「:40 ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります。:41 人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行う者たちをみな、御国から取り集めて、:42 火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。」

イエスはこのたとえを話されて、このように神の敵、神の救いを受け入れない者たちに対して、神のさばきがあるということをお話しておられます。

(1) そのとき : いつそれが起こるのか？それは40節にあるように「この世の終わりにそのようになります。」とこの世の終わりにこのような神のさばきが起こることです。いったいいつのことでしょう？これは「大きな白い御座のさばき」(黙示録20:11「また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。」)のことです。最終的に、神に逆らったすべての者たちが神の前に立って、その罪が明らかにされて、そして、永遠の地獄に至るというそのさばきです。

(2) その内容 : その内容を見ると「毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります。」とあります。まさに、その当時の農夫たちが毒麦を集めてそれを火で焼くように、神に逆らった者たちにも同じことが彼らに起こると教えるのです。

主から遣わされた天使たちは毒麦、すなわち、神が備えてくださった救いを受け入れなかった人たちを「御国から取り集めて、:42 火の燃える炉に投げ込みます。」と、そのように書かれています。恐らく、皆さんは今、41節の「御国」ということばに少し引っ掛かるでしょう。なぜなら、「御国」というと私たちが連想するのは「天国」だからです。では、最後のさばきのとき神はある人を天国から取り集めるのか？もっと言えば、天国に救いに与っていない人が入っているのか？と思います。ここに書かれている「御国」は天国のことではないのです。これは「この世界」のことです。

なぜなら、御国とはそこに王がいてその王がすべてを治めています。確かに、この世はサタンが治めていると言います。でも、サタンは神の許可なしに何もすることができません。ですから、確かにサタンが支配していても、そのすべてをコントロールされているのは神です。その観点から言うなら、確かにサタンがいろいろな働きをしますが、神の許可の元に行っているのです。ですから、すべてを治めておられる神が支配している世界ということで「御国」と言うのです。ですから、この「御国」は天国ではなくこの世で、毒麦を集めるように、この世から神に逆らう者たちを集める、「つまずきを与える者や不法を行う者たちをみな、」と書かれています。

そのとき、神のさばきが下るときには、麦と毒麦が明確に区別されるのです。ですから、こういうことです。今、私たちはこの地上に居てちょうど芽が出始めるときと同じように区別がつかないのです。この後、見ていきますが、教会の中でもこの世界でもクリスチャンと称する人はたくさんいます。問題は、本当に救われているかどうかということです。多くの皆さんは、たとえば、「福音とは何ですか？」、「どのようにして救われますか？」と質問したとします。すると多くの方は「イエスさまが私の罪のために十字架で死んで三日目によみがえったことを信じたら救われます。」と答えるでしょう。問題は、そのことを心から信じているかどうかです。知っている人は多くいても信じているかどうかは問題です。

ですから、恐らく、この最後のさばきのときに神の真理を知っているたくさんの不信者が神の前にさばかれます。聖書を見た時、どれだけの真理を知るかを教えているのではありません。その真理である神を信じているかどうかです。そこが問われるのです。ですから、今、この私たちの教会にあっても、ここにおられるすべての人が間違いなく救いに与っていることを期待しますが、それはあなたしか、そして、神しか分かりません。もちろん、救いに与った者たちにはその特徴があります。もう私たちは何度も学んで来ました。私たちが考えなければいけないことは、私は今この瞬間にこの地上での最後の呼吸をしたなら、その後、私はどこに行くのかということです。これは一人一人が考えなければいけません。

ん。皆さん自身がその確信を持つことです。なぜなら、周りの人が「あなたは救われている」と一生懸命あなたに語ってくれて、それであなたが納得したというなら、その救いはちょっとクエスチョンがつかます。救われているかどうかはあなたのうちにいる聖霊があなたにそのことを明らかにするからです。聖霊なる神が「あなたはわたしのものである」ということを明らかにしてくださるのです。

ですから、この地上にあって私たちはその辺りがはっきりしないけれど、ちょうど芽が出て来たときの麦と毒麦のように、その区別は非常につきにくいのです。でも、神の前にさばかれるときにはその区別は明確になります。

さばきの後どうなるのか？ 4 2 節に書かれています。「火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。」と。この箇所が教えていることは「大変な苦しみがそこに待っている」ということです。罪の赦しを拒んだ者たちがどこでどのように過ごすのか？と。世の中はいろんなことを言います。自分の友人の多くはこの救いに与っていないから私は天国ではなく地獄を選択すると。そこでまるで同窓会でもするかのように言いますが、とんでもありません。そこには終わることのない苦しみが待っていません。ですから、そのことを表現しているのです。

「泣いて歯ざしりする」と。「泣く」とは「大変な悲しみ、悲嘆にくれる、嘆き悲しむ」その姿です。どんなに悔いて嘆いてもどんなに悔いてもそこには救いはありません。その状態です。どんなに後悔しても取り返しつかないのです。「歯ざしりする」は「大変な苦しみ」です。苦しみや痛みという感情を表したことばです。ですから、少なくとも、この聖書の箇所が私たちに教えてくれるのは、救いを拒んだときにその人自身が行って来たすべての罪にふさわしいさばきを自分の身に招くということです。まさに、ここで語られている通りです。悲しみの中、絶望の中であって、苦しみの中であって、自らはそこで永遠を過ごす。黙示録のことばを見てください。14 : 10-11 「:10 そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。」、つまり、その人は神の怒りをそのまますべて飲むということです。当時の人たちは、商人の中にもぶどう酒に水を混ぜて売っている人もいました。ここで言われていることは「混ぜ物はいっさい含まれていません」です。神の怒りをそのまま100%飲み干さなければならないということです。「また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。:11 そして、彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。獣とその像とを拝む者、まただれでも獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も休みを得ない。」、見て来たように、終わることのない苦しみです。

こうしてみことばは私たちに神に逆らった者たちにはそれにふさわしいさばきがあることを警告しています。皆さん、考えてみると、罪のさばきがなければ救いの必要性はないわけです。みな眠ってしまうのなら救い主が来る必要はありませんでした。だから、イエスが来られたということは「さばきがある」ということを私たちに証明しているのです。神に逆らえば必ず神からのさばきを受ける。この世の法律を犯せば必ずこの世の法に基づいてさばかれるように、神の法に逆らえば神ご自身がさばきをもたらすのです。

ですから、イエスはこのたとえを用いてこの毒麦に対して、神に心を閉ざして救いを拒み続ける者に対して、また同時に、「つまずきを与える者や不法を行う者たち」に対して、それにふさわしい永遠のさばきがあるということを警告されたのです。同じことをパウロはⅡコリント11 : 13-15でこのように言っています。「:13 こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に変装しているのです。」、どういうことか？パウロの働きを否定する者たちがいました。彼らは自分たちが「使徒」だと人々の前で言います。ところが、彼らはそれを使って金儲けをします。そこでパウロは彼らのことをこのように責めるのです。こう続きます。「:14 しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。:15 ですから、サタンの手下どもが義のしもべに変装したとしても、格別なことはありません。彼らの最後はそのしわざにふさわしいものとなります。」、サタンが光の天使のように変装する。それなら、サタンのしもべたちも同じことをすると言うのです。

ですから、イエスが言われたように「つまずきを与える者や不法を行う者たち」、実際に、神に対して背を向け続ける者たち、救いを拒み続ける者たち、同時に、様々な形で人々がこの真理に救いに与らないようにと邪魔する者たち、そのすべての者たちがこのさばきに服すると教えるのです。ですから、神に逆らった者たちはみな同じようにこの永遠のさばきに至るのです。

(3) 救いのチャンスがある : このたとえがこのときイエスによって語られた理由は、主に逆らうものが多くいることをイエスご自身がよく知っておられたからです。彼らにはさばきがあるということ教えるだけでなく、同時に、救いがあることを教えるためです。

(4) 主の祝福 4 3 節 : 「そのとき、正しい者たちは、彼らの父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい。」と書かれています。「正しい者たちは、」すばらしい祝福を見ることが出来るということです。確かに、私たちは生まれながらに神に逆らう者として歩んで来ています。そして、その私たちに永遠の滅びがふさわしいのですが、神の祝福に与ることもできると言うのです。救いがまだ

残されているからと…。イエスはこのたとえを使って、神の働きが為されるときには神の敵の働きも同じように為される。そして、神の敵を信じて従う者たちはこのようなさばきに遭う。でも、そこにはまだ神の祝福が残っていると教えられたのです。「耳のあるものは聞きなさい。」（マタイ 11 : 15）と今、主が語られたこのメッセージは大変重要だということを言われるのです。なぜなら、それぞれの永遠に関わることだからです。

B. からし種とパン種 31-33節

イエスはこの後続けて二つのたとえを話されます。一つは「からし種」、もう一つは「パン種」のことです。31-33節にそのたとえが出て来ます。初めに言いますが、この二つのたとえが私たちに教えてくれるのは先ほどから見てのことと同じです。「神の働きが為されるところには必ずサタンの働きも為される」ということです。

1. からし種 31-32節

「:31 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、からし種のようなものです。それを取って、畑に蒔くと、:32 どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります。」、「からし種」というのを思い出してください。マタイ 17 : 20「イエスは言われた。「あなたがたの信仰が薄いからです。まことに、あなたがたに告げます。もし、からし種ほどの信仰があったら、この山に、『ここからあそこに移れ』と言えば移るのです。どんなことでも、あなたがたにできないことはありません。」と、信仰の成長のために「からし種」を使っておられます。

ほんとに小さな一つの点のような種が成長するのです。確かに、このマタイ 13章のたとえの中で、どんな種よりも小さな「からし種」が鳥が枝に巣を作るほどに成長していくとありますが、これが教えようとしているのは、主の教会が大きく成長していくということです。この当時、イエスがおられた時代は数においても影響力においてもその群れは小さい存在であったけれど、必ず大きく成長していくと言います。そのことを主が教えておられると以前学んだときに説明をしました。

確かに、その意味もここには含まれているでしょう。ただこの箇所を以前学んだときもそうでしたが、どうしても考えなければいけないことがここにあるのです。それは「鳥」のことです。「空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります。」とあります。皆さんもこのからし種の木を考える時に、杉やヒノキのような大木にならないことはお分かりですね。成長しても3メートル位、もう少し高いのもありますが、これは根っここのところから枝分かれして行って、成長したとしても一般的に言われる「低木」です。灌木のこと、そんな大きな木にはならないのです。でも確かに「成長する」ということです。ただ、しっかり見ておきたいのは、そこに空の鳥が来て巣を作るほどの木になるということです。これは何を言っているのかと考えませんか？確かに、この「からし種」と「パン種」についてはイエスの補足説明がないのです。ですから、いろんな考え方が確かに聖書学者たちの間に存在しています。

この「鳥」のことはマタイ 13章の中に出て来ました。4節に「蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると鳥が来て食べてしまった。」とあります。この「鳥」とは何なのか？19節を見てください。「御国のことばを聞いても悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪って行きます。道ばたに蒔かれるとは、このような人のことです。」と説明されています。ですから、4節では「鳥が来て食べてしまった」とあり、19節のイエスの説明では「悪い者が来て、…奪って行きます。」とそういう意味だと言われます。実は、この19節の「悪い者」ということばは単数形です。でも、4節とまた今見ている32節の「鳥」は複数形です。「悪い者」とは一人、サタンです。でも、そのサタンに仕える者たちは無数いるわけです。ですから、この「鳥」とはサタンに仕える者たちで、その者たちがサタンが望むことを為すのです。

そうすると、32節、確かにからし種が大きく成長していく、でも、空の鳥が来てその枝に巣を作る、恐らく、成長するだけでなく様々な惑わしを受けるということです。先ほどから見て来ているように、その悪の影響、働きというものが為され続けて行くということです。だから、その後「パン種」のたとえを使ったのでしょうか。なぜなら、この二つは非常に関連しているからです。

2. パン種 33節

からし種が大きな低木になった。でも、そこに鳥がやって来て巣を作る。教会は確かに大きくなって行くでしょう。でも、そこには間違いなく神の敵の働きが為され続けるのです。そして、その働きはまさにパン種のように教会の内部において働きを為すのです。パン種はわずかなイーストがパン生地全体を発酵させるわけです。この当時、発酵したパン生地の一部を残しておいてそれをまた次のパン生地に混ぜて発酵させたのです。でも、少なくともここで「パン種」と言った時に私たちが考えることは、聖書の中を見た時にこれは「悪の象徴」として用いられていませんか？もちろん、普通に「パン種」と捉えることもできますが、私たちがそれを言う時はどちらかと言うとそれは「悪の象徴」です。

「主への火によるささげ物」（レビ 2 : 11）にはパン種を入れてはいけません。また、過越の祭りでも

7日間パン種を用いることが禁じられましたから、敬虔なユダヤ人たちはパンを焼いてもそこにイーストを使って発酵させることはしません。また「種を入れないパンの祭り」（Ⅱ歴代誌30：13、エズラ記6：22）、新約では「種なしパンの祝い」（マタイ26：17、ルカ22：1）と呼ばれ、敬虔なユダヤ人たちはパン種抜きでパンを焼いていました。ですから、主にささげ物をする時も過越の食事をする時も、種なしパンの祭りをする時も彼らはそのパンにパン種を入れなかったのです。

何を象徴しているのか？つまり「罪を除きなさい」ということです。ですから、この罪の象徴としてパン種が使われていたのです。マタイ13：33には「イエスは、また別のたとえを話された。「天の御国は、パン種のようなものです。女が、パン種を取って、三サトンの粉の中に入れて、全体がふくらんで来ます。」と書かれています。1サトンは13リットルですからその3倍、39リットルの粉です。その中にパン種を入れると「全体がふくらんで来ます。」と、本当に小さなものが全体に影響を及ぼすということです。

教会は成長するでしょう。でも同時に、そこに悪の働きが続くと言います。そして、それは外部からでなく内部から働いて様々な影響を及ぼしてしまうのです。恐らく、そのことがイエスがここで話そうとされていたことです。この箇所だけではありません。そのような教会の中に入り込んで来る「にせ教師たち」の警告がみことばの中に見ることが出来ます。

主はここで、教会がこの悪の影響を受けていることを明らかにされました。

○教会が悪の影響を受けていることの事例

1) 間違った教えによって：Ⅱペテロ2：1を見てください。教会の中に異端が入り込んで来ます。「1しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現れるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、…」この「にせ教師」が何をするのか？「にせ教師」たちは教会の中に入り込んで来るのです。外部からの影響ではなく、教会の内部から惑わしをもたらすのです。「異端」です。彼らは神の真理を伝えないで自分たちの考えがあたかもそれが神の真理であるかのように伝えるのです。それが彼らの意図することです。惑わすのです。

(1) 惑わし方：しかも、「ひそかに持ち込み、」とあります。つまり、表立ってはそういう働きをするようには見せないのです。だから、こういう人たちです。彼らはみことばが教えていることを肯定します。なぜなら、初めからみことばを否定する人なら、教会はそういう人を招きません。たとえば、「聖書は神のことばではない」とか「イエスは救い主ではない」とか、三位一体の神を否定するなど、それは「別のところに行ってください」となります。「ひそかに」入って来るということは人々は彼らを認めているのです。恐らく、その人の話は筋が通っているので人々はその人に信頼を置きます。しかし、知らず知らずのうちに騙されていくのです。このような人たちのことをイエスはこう言っています。マタイ7：15「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」と。こうして、偽りの教師は教会の中に入り込んで来るのです。そして、徐々に聖書の教えでないものを教えることで人々を惑わし始めるのです。まさに、パン種が働きを為すのと同じです。

(2) 惑わしの教え：彼らはどんな異端を持ち込むのか？もう一度Ⅱペテロの2：1からを見てください。1節の後半「自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえて、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。」「偽りの福音」です。つまり、主イエス・キリストによる贖いを否定するのです。「買い取ってくださった」、これは「代価を払って買い取る」ということです。イエスがご自身のいのちという代価を払って私たちを罪の市場から買い取ってくださった、救われたということです。この人はそれを「否定する」のです。しかも、この「否定」という動詞は現在形を使っています。つまり、継続して習慣的に否定し続けていくということです。ですから、この人たちは主の救いを否定し続けているのです。いつまで経っても悔い改めて救いを信じようとしないう、それだけでなく、そのように教えるのです。誤った福音を教えるのです。

確かに、みことばを見た時に、このように福音でない福音が真の福音であるかのように語られていることが記されています。ガラテヤ1：6、7「6私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。7ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるのではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。」とパウロが言っています。また、Ⅱコリント11：4でも「というわけは、ある人が来て、私たちの宣べ伝えなかった別のイエスを宣べ伝えたり、あるいはあなたがたが、前に受けたことのない異なった霊を受けたり、受け入れたことのない異なった福音を受けたりするときも、あなたがたはみごとにこらえているからです。」とあります。ですから、こうして偽りの教師たちが入り込んで来て、聖書の教えていないことをあたかも聖書が教えているかのようにして教えるのです。そうして惑わすのです。

私たちが救いのことを考えるときに「どうすれば私たち罪人がこの救いに与るのか？」と言うとき、いろいろな考えが出て来ます。多くの日本人は「洗礼を受けることによって救われる」と言います。そんなことを聞いたことがありませんか？昔、聞いて笑ったのですが、イエスを信じて半分片足をキリスト

教に突っ込んで洗礼を受けて両足突っ込んだと…。でも、それは聖書の教えですか？ある人はこう言うかもしれません。「イエスさまを信じたらあなたは告白しなければ救いに与らない」とか「クルセードに出かけるなど、集会に行って手を挙げる、何かにサインする。そのことによって救いに与る。」とか、「だれかに祈ってもらって救いに与る」とか、もしかすると、皆さんもこのようなことを耳にするかもしれません。でも、聖書を見ると、そんなことはどこにも教えられていません。聖書が教えることは「心に信じて義と認められる」です。何かの行ないによってではないのです。

なぜ、私たちが「心に信じて義と認められ、口で告白して救われる」のか？「口で告白する」という行ないは、その人がすでに「義とされたことの証明」なのです。なぜ、バプテスマを受けるのか？バプテスマによって救われる人などどこにもいません。行いによって救われる人はいないからです。バプテスマを受けるのは、イエスを信じて「私はキリストによって罪が赦されたこと、キリストとともに死にキリストともによみがえった」と、そのことを見える形で表わすからです。行為によって救われるのではない。

なぜ、皆さんにこのようなことを話しているのか？いろんな教えがいつの間にか私たちの周りに入り込んで来て、あたかもそれが聖書が教えているかのように語られて、私たちはそれを聞いて信じてしまう危険性があるからです。私たちの責任は、講壇で語られるメッセージや、皆さんがいろんな所で聞くメッセージ、皆さんが読む本やラジオやテレビなどから聞くメッセージが、本当に聖書が教えていることなのかどうかを判断することです。その責任は皆さんにあるのです。「何でも信じて良い」のではないのです。私たちは神の言われていることを信じるのです。

ですから、こうしてみことばが私たちに教えてくれているように、このように偽りの教師たちは教会の中にひそかに入り込んで来て、聖書の教えていないことをあたかも教えているかのように伝えるのです。「にせ教師たち」はこういう働きをするのです。彼らは教会の中で間違った教えをもって、間違った教理をもって惑わすのです。

2) 間違った生き方によって : II ペテロ 2 : 2 「2 そして、多くの者が彼らの好色にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。」、また、2 : 18にも「彼らは、むなしい大言壮語を吐いており、誤った生き方をしている、ようやくそれをのがれようとしている人々を肉欲と好色によって誘惑し、」とあります。つまり、このようににせ教師たちは間違った教理を教えるだけでなく、間違った生き方をもって人々を惑わすのです。ここに書かれてある「肉欲と好色によって」とは「自分の罪の性質から出て来る願望」です。自分の思い通りに生きていきたいという欲です。神を喜ばせるのではなく自分の欲、罪を満たしたいという、そのような思いに基づいてこの人たちは生きているのです。そのように生きますね、救われていないのだから…。この人たちがそういう生き方をすることによって「それを逃れようとしている人々を誘惑する」と書かれています。「のがれようとしている人々」とは、今までの自分の歩みが間違っていることに気付いて、そこから離れて正しい行ないをしようとする信仰的に幼い人たちのことです。その人たちを惑わすと言うのです。

つい最近も、アメリカの大きな教会の牧師が「私は信仰を捨てます」ということを宣言しました。なぜそんなことが起こるのか？何万人も集まるような大きな教会です。キリストを捨てると言うのです。だから、みことばは私たちに教えてくれているのです。教会の中にも救われていない教師たちが入り込むと。もっと言えば、救われていない牧師たちが入り込む可能性があるのです。

かなり前ですが、私が北欧に行った時にノルウェーの一人の宣教師と時間を過ごした時に、ノルウェーの問題についてこう言いました。「我々の国では父親が息子にこう言う。『仕事があれば牧師になればいい』と。ルーテル教会は国教です。国の宗教です。牧師になったら食っぱぐれることはないから。これは神さまの導きではなくて一つの仕事として考えている。」と。その人たちの信仰とはいったいどのようなのでしょうか？

ですから、パウロが、そして、ペテロが、そして、主ご自身が私たちに警告していることを私たちは今見て来ました。このようなたとえでした。確かに、小さなからし種ほどの教会が成長していく、でも同時に、そこには悪の働きがある、惑わす者たちがいる。ちょうど、パン種のように内部からそれを発酵させる、内部からいろんな悪影響を及ぼしていく。どんなふうによ？ひそかに入り込んで来て、そして、間違った教えをし間違った生き方をもって「こういう生き方をしてもいいのだ」と、神に従おうとしている人たちを惑わすのです。皆さん、これが私たちの敵であるサタンが行っていることです。サタンだけでなくサタンに仕える者たちを使いながらこのような働きを教会内外で行うのです。不信者が救いに与らないようにと。

また、サタンは教会が聖書から離れ世俗的になっていくようにと働きます。判断の基準がみことばでなくてこの世の基準になるのです。世の中の常識はどうか？考えはどうか？と、そうなる恐れがあります。だから、私たちは注意しなければいけません。こういったことが私たちの周りで起こっている可能

性があるからです。

【主イエスは、パリサイ人の偽善と間違った教えを「パン種」（マタイ 16 : 6 「パリサイ人やサドカイ人たちのパン種には注意して気をつけなさい。」、マルコ 8 : 15 「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい。」、ルカ 12 : 1 「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。それは彼らの偽善の事です。）」と呼んで非難し、人々に警告を与えました（ガラテヤ 5 : 9 「わずかのパン種が、こねた粉の全体を発酵させるのです。」、I コリント 5 : 6 「あなたがたの高慢は、よくないことです。あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。）」】

皆さん、我々信仰者はしっかりと、神が何と言われているか、聖書が何と教えているのか、そのことに立たなければいけません。そのような信仰者として私たちが歩み続けていくことを、今一度確認して、そのような歩みをしっかりと続けて行くことです。

最後に 13 : 43 「そのとき、正しい者たちは、彼らの父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい。」と、確かに、私たちは天に上がった時に主の栄光を輝かせます。でも皆さん、もう私たちは天の御国の国民とされたのでしょうか。救いに与ったということは天国民とされたことです。私たちは天に行って神の栄光を現す、確かにそうです。でも、今地上にいてその働きをします。あなたや私の責任は「神の栄光を現わすために生きる」ことです。それが私たちの務めです。それが私たちの使命です。そのためには「みことばに立つこと」です。「みことばの真理に立つ」ことです。そして、神の助けをいただきながらそのみことばの真理に従うことです。その時にあなたは輝くのです。なぜなら、あなたのうちにいる神があなたを喜び、あなたを通してご自身を明らかにしてくださるからです。そのようにして私たちは生きるのです。その思いをもってこの新しい週をしっかりと歩んでいきましょう。